

鳥取県環境学術研究等振興事業費補助金研究実績報告書（北東アジア学術交流部門）

研究期間（ 年目/ 年間）

研究者 又は 研究代表者	氏名	(ふりがな) いのうえ まさひこ 井上 雅彦
	所属研究機関 部局・職	鳥取大学 大学院医学系研究科 臨床心理学講座 教授 電話番号 0859-38-6410 電子メール masahiko-inoue@med.tottori-u.ac.jp
研究課題名	日韓における自閉症スペクトラムに関するアセスメントツール開発	
研究結果	<p>目的 自閉症に関する早期発見と治療は医療・福祉・教育の各分野で国際的に大きな課題となっている。本研究では我が国で開発されたPARS(自閉症評定尺度)を元に、韓国において自閉症のデータを収集し、韓国におけるカットオフ値と分析・比較検討することで、国際的な自閉症評価に対する知見と韓国での標準化に向けた基礎データを得ることを目的とし、当初計画案にしたがって以下の通り遂行した。</p> <p>方法</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究チームの立ち上げと役割分担の確認 11月 2. PARSの韓国版作成のための翻訳とバックトランスレーション 12月 3. 韓国でデータ収集を行う実施者に対するトレーニング講座の実施 1月 4. 韓国での調査協力者募集 2月 5. データ収集:6歳以下の子どもを持つ親(自閉症のある子どもを持つ親、自閉症以外の臨床群の親、定型発達の子どもの親)全53名 3月 6. データ分析と検討 3月 <p>結果 自閉症群と非自閉症臨床群、定型発達群のPARS得点のデータ比較において、各群の平均値は46.73、36.55、8.71であり、自閉症群が高い傾向にあった。分散分析の結果、群間において、ピーク評定、現在評定ともに有意な群間差が得られた(ピーク評定(F(2, 51) =23.1473, p<.001) 現在評定(F(2, 51) =23.2031, p<.001))。tukey法の多重比較の結果、自閉症群と非自閉症臨床群がともに定型発達群に比べて有意に高い結果を得たが、自閉症群と非自閉症臨床群間には有意な差は得られなかった。</p>	
研究成果	<p>韓国の複数の研究者と連携しPARS韓国版(幼児期版)を作成することができた。またデータ収集によって60名あまりの親に実施し、一定の成果を得た。しかし、実用化していくためには、サンプル数の不足から自閉症群と非自閉症臨床群間の識別について課題が残った。韓国研究者との共同研究において、自閉症のアセスメントツールの開発については強いニーズがあることが共通理解され、今後の研究の発展が期待される。</p>	
次年度研究計画		
報告責任者	所属・職 氏名	国立大学法人鳥取大学研究協力課研究助成係・朝野弘昭 電話番号 0857-31-5494 電子メール h-asano@adm.tottori-u.ac.jp

--	--	--

- 注1) 表題には、環境部門、地域部門、北東アジア学術交流部門のいずれかを記載すること。
- 2) 「研究期間（ 年目/ 年間）」及び「次年度研究計画」は、環境部門のみ記載すること。
- 3) 研究者の知的財産権などに関する内容等で、非公開としたい部分は、罫線で囲うなど明確にし、その理由を記すこと。
- 4) 研究実績のサマリーを併せて提出すること。

研究実績サマリー（北東アジア学術交流部門）

日韓における自閉症スペクトラムに関するアセスメントツール開発

研究代表者 井上雅彦
鳥取大学 医学系研究科 臨床心理学講座 教授

1. はじめに

自閉症に関する早期発見と治療は、医療・福祉・教育の各分野で国際的に大きな課題となっている。特に北東アジアにおいては、自閉症への早期発見のためのツールは不足しているのが現状である。

我が国で開発されたPARS（自閉症評定尺度）は、親からのインタビューを元に子どもの自閉症の支援ニーズの有無をアセスメントするツールであり、学術的にも優れており、厚労省も推奨しているものである。我々は、PARS韓国版を作成するための基礎的研究として、韓国研究者と協力し、韓国における自閉症のデータを収集し分析することで、韓国での標準化に向けた基礎データを得ることを目的とした。

2. 方法

1) PARS 韓国版の翻訳

PARS は幼児期版、児童期版、青年・成人期版の 3 種があり、本研究ではこの中で幼児期版の翻訳を行った。日本に留学経験があり、障害児教育に関する学位を持つ韓国の大学教員が翻訳を行い、その訳を日本語に直したバックトランスレーションを日本語版PARS開発者 2 名で確認修正作業を行い、韓国版を作成した。

2)韓国での実施者に対するトレーニング講座の実施

日本からPARS開発者でもある研究代表者と分担研究者の2名が、韓国においてデータ収集を行う実施者に向けてトレーニング講座を開催した。

3)データ収集

韓国において、6 歳以下の子どもを持つ親（自閉症のある子どもを持つ親、自閉症以外の臨床群の親、定型発達の子どもの親）全 53 名を対象に韓国版 PARS を実施した。

3. 結果と考察

自閉症群と非自閉症臨床群、定型発達群の PARS 得点のデータ比較において、各群の平均値はそれぞれ 46.73、36.55、8.71 であり、自閉症群が高い傾向にあった。分散分析の結果、群間において、ピーク評定、現在評定ともに有意な群間差が得られた（ピーク評定(F(2,51) =23.1473,p<.001) 現在評定(F(2,51) =23.2031,p<.001)。tukey 法の多重比較の結果、自閉症群と非自閉症臨床群がともに定型発達群に比べて有意に高い結果を得たが、自閉症群と非自閉症臨床群間には有意な差は得られなかった。

本研究の結果、韓国版 PARS の開発と実施に関して一定の成果を得た。今回、韓国研究者との共同研究の中で、韓国の自閉症支援において PARS の開発についての強い現場や保護者のニーズがあることが確認された。しかし、韓国版 PARS を実用化していくためには、未だサンプル数が不足している。特に自閉症群と非自閉症臨床群間の識別について課題を残しており、データを追加し詳細な分析を必要とする。

本研究により、韓国自国での研究資金調達と研究チームの立ち上げなどの動きが起っており、北東アジアに対する研究交流と国際貢献という目的は十分に達成されたと考えられる。